
星の空へ

影楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の空へ

【Nコード】

N3301D

【作者名】

影楼

【あらすじ】

冬休み入りの日、雄雅は星を見ながら眠る…。星好きな少年と存在を許された少女の恋物語。

「……うおっ」

気が付くと広い空地に雄雅は寝そべっていた。

空地周辺に街灯はなく、ただ星が辺りを照らしている。

ふと、空地横の道路に人影が見えた。急いで立ち上がり、

「誰かそこに居るのか？」

と言ってみる。よく目を凝らして見ると、髪の長い少女……とまでは断定できた。それ以外は宵闇に隠れ薄く輪郭が見えるだけである。

「こんにちは」

弾むような声色で少女は雄雅に近づきながら答えた。

次第に色が判別出来る様な近さまで来ると、

「お名前は？」

と質問してきた。

流麗な青い長髪、丁度雄雅の肩位までの身長、赤い長袖のブレザーにチェックのミニスカートといった格好だった。

「俺の名前は茸河雄雅、たけがわゆうが君の名前は？」

簡潔に答え、自らも質問をする。辺りに人の気配は無く二人だけの様だ。

「私は咎理帝、とがりみかどよろしくね」

偉くカッコいい名前だな、と雄雅は内心想った。

そして カッコいいかな と何処からともなく答えが返ってきた。

目の前に立つ少女の声で。

「……え」

違和感を感じ、その声が目の前に居る少女が口から放った言葉では無い、と言う事実を認識するのに数秒かった。

テレパシー、そんな言葉が頭を過った。

「もしかして、人の心が読める？」

頭で考えている事と違う事を雄雅は帝に訪ねた。

「…うつん読めないよ？でもなんで聞こえるのかな」

神妙な顔で、それでいて可愛らしく、帝は首を振った。

もしかして俺だけ分かるのか？と思ってみる。

そしてまた 私達だけ心が通じてるのかも と声無き声が返ってきた。

「まあ、聞こえてるんだしな」

あえて追及はせず、話を切り替える。

「所でこんな時間に何やっているんだ？」

「うん、星が綺麗だったから」

雄雅は空を眺めてみた。月は見えず、辺り一面に星が散らばっている。

そう言えば俺もこの空を見に来てたんだっけ、等と試してみる。

「星は綺麗だね」

今度の答えは声として返ってきた。

それを雄雅は空を眺めながら軽く頷いて返した。

ふと腕時計を覗く。時間は午後11時32分。

「もうこんな時間か！！やっべ」

予定時間をかなり過ぎていた事に雄雅は慌てる。

「あ、もう帰るの？」

「ああ、君も早く帰った方がよいよ。夜道は危ないからね、そんじゃ」

全速力で家まで走る雄雅に 明日もまた来てね と声無き声が聞こえた。

少しスピードを緩め、また来るよ、そう呟きまた全速力で家に帰った。

「ただいまー」

「お帰り、今日は遅かったわね」

帰り着くやいなや、母が台所から出てきた。

ガチャ、っと玄関の鍵を閉め、

「ま、ちよつとね」

簡潔に答え階段を駆け上がる。

自分の部屋に入り、机に向い勉強。これが、いつもの習慣だった。ただ、今日だけは勉強に集中出来ず数分で止め、すぐさま布団に潜り込んだ。

無論原因はあの少女、帝である。例えどんなに考えようと結論付ける事は出来ない現象を、雄雅は何を思ったのか考えていた。だが、やはり結論は出る訳もなく雄雅は自然と眠っていった。

早朝7時24分、時計は鳴っていない。

「ふあああ……って遅刻だあああ!!」

慌てて布団から跳ね起きる。いつもならこの時間帯はとうに家を出ている時間帯だった。

急ぎ制服に着替え、階段を駆け降りる。

「母さん!!飯は!!」

台所に母は居ない、常ならば朝ご飯が出来上がっている時間の筈だった。

ジャーとトイレの流水音が聞こえる。

「母さん!!飯!!」

トイレから出てきた母に叫ぶ。

「うるさいわねえ、今日は土曜日よ?休みじゃ無いの?」

ハッと今更ながら気づく、それに加え今日から冬休みの筈だった。

「……ミスった……」

雄雅は小さくぼやいた。

「全く、何慌ててるんだか」

母の笑い声が階段を登る雄雅の背中に聞こえた。

ハハ……と苦笑いを浮かべ自分の部屋へと戻った。

制服を着たまま布団の上に寝転がる。今日から暇になるな、等と

思いながら雄雅は二度寝した。

気付けば昼の11時、良く寝たな、と自分を称揚する。

「何もやる事無いしなあ」

母が聞けば「勉強しなさい」と言うのはすぐ想像が着いた。

雄雅は友達の家で勉強すると母に言い家から飛び出していった。無論勉強はする筈はない。

午後8時2分、母が夕食を食べ終え台所へと向かう。

「ごちそう様」

一步遅れ雄雅も夕食を食べ終え、雄雅は玄関に向かった。

「早く帰って来なさいよー」と食器を洗う母の声が聞こえる。

「おーっす」

雄雅は気前良く返事をし、家を後にした。

居るのか？と雄雅は昨日逢った少女へと心の内で語りかける。

居るよ、今日は早かったね　と予想通り返ってきた。

雄雅は空き地を見渡す。空地の真中に置かれている古い土管の上に、昨日と同じ格好の少女が座っていた。やはり星を眺めている。

無言で雄雅も隣に座る。

えと…雄雅って呼んで良い？　今度は帝からの問い掛けだった。

良いよ、俺も帝って呼んで良いかな？空を見上げたまま雄雅も心で話す。

うん！　威勢の良い声で答えた。

二人はまた空を見上げ星を眺める。

「俺の話でも聞ukai？」

「うん、聞かせて」

二人は楽しそうに笑い合う。その笑い合う姿は傍から見れば、恋人同士にも見える程だ。

「あはは、雄雅って面白いんだね」

「そりゃ面白くなくちゃね」

腕時計を見ると午後10時11分、まだ時間はあった様だ。

ふと、帝が口を開く。

「私の話も聞いてくれる？」

「ああ、聞かせてくれ」

雄雅は帝の声に耳を傾ける。帝の目の色が不意に変わったのに気づきながらも。

「私…両親が居ないの」

心の声は聞こえない。

「お父さんは私の生まれてすぐ死んだらしくて、お母さんは去年…」

「今一人暮らしなのか？」

帝は首を横には振らず、頷いた。

「そうだったのか……それなら俺の家に来ないか？」

何の思いもなくただ尋ねていた。

そして一瞬の間を置き、

「えっ…」

と帝が小さな声で驚く。

雄雅も今になって自分の言った言葉の意味を理解したが、今更自分の言った事など取り消せる訳もない。

「部屋一つ空いてるからさ、それ使ったらどうかなと思ってさ」

咄嗟に空き部屋がある事を思い出し、言ってみた。

「良いの？」

予想に反する、肯定の返事だった。

「俺は良いんだけど、母さんがOK出すかな…まあ、言ってみ

るよ」

どうせ良いと思うんだけど、内心思いながら。

今から雄雅の家に行っても良いかな？ 予想外の言葉が聞こえてきた。

ああ、別に良いよ、雄雅は特段気にかけるまでもなく返した。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

時間は午後10時48分、早い帰宅になりそうだ。

「ただいまー」

「お邪魔します」

いつもの声に少女の少し高い声が加わる。

「お帰り。あらあら、お客さんかしら」

母がリビングから扉を開け出てきた。開いた扉の奥から、

「おっ、雄雅お帰り」

父の低い声が全く何の前触れもなく聞こえてきて、雄雅は一瞬驚いた。

「何だ、父さんか」

今日は父が週に一度帰って来る日だった事を雄雅は思い出した。不安は募る。

「あのさ、この娘家に住まわせても良いかな？」

突然の、だがしつかりとした雄雅の言葉に母は一瞬驚く。

「ええ、私は別に良いけど……とにかく、玄関で話すのもなんだから中で話しましょ」

雄雅と帝は未だに靴を履いた状態だった。母に促され雄雅と帝はリビングに入った。

父さんは別に良いって言いそうだな、長年の経験か、単なる想像か。前者に限りなく近い事は確かだった。

二人が炬燵に座るや否や、父は何の躊躇いもなく、

「俺は別に構わん」

と、一言で承諾しこの場は収まった。

「じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

「Good night」

父のお気楽な声が返事として返ってくる。どうやら酒で酔っているみたいだった。

二人は階段を上り雄雅は部屋の扉を開ける。ふと気付き、向いの部屋の扉を開けた帝に、

「そう言えば、着替えは持って来なくて良いのか？」

今更の事に気づく。

「あつ、忘れてた」

帝も今更気づく。

「今から取ってくるね！」

「あ、つと俺も行くよ。夜道は危険だから」

良心からか、期待からか、雄雅は言う。

「それと荷物は二人で分担した方が良いからね」

ありがとう 返事は心の中で。

「母さん、ちょっと出かけて来るね。すぐ戻るよ」

「はい、すぐ戻って来なさいよー」

すぐは無理だな、自分から言い出した事にケチをつける雄雅であった。

時刻は午前0時21分、今日も月は見えず、星が辺りを照らしだしている。

ガチャ、扉を開ける。二人は空を少し眺め、よし行こうか、と雄雅が促す。

二人は小走りで夜の闇へと消えていった。

「ここだよ」

走って2、3分だったろうか、二人は咎理家に着いた。
実に普通の一戸建てである。

帝がカギを開け中に入る、次いで雄雅も中へと入る。

「お邪魔しまーす」

家の中は到底人が住んでいるようには見えない雰囲気だった。かと言って蜘蛛の巣が張ってある訳でもない。

「ここで待ってて」

そう雄雅に言って帝は奥の部屋へ行った。
躊躇い無く雄雅は部屋中を見回す。

「凄い片付いてる…俺の部屋とは大違いだな」

小さくぼやく。雄雅の部屋は片付いていない訳でも無いが、
そうこうしている内に帝が奥から出てきた。

「おつす、じゃ行こ」

帝の可愛らしい声が背中の方から聞こえて、

「じゃあそれ持つよ」

振り返って荷物を持つ。それほど重くも無かった。

午前1時13分、雄雅と帝は茸河家へと帰って来ていた。
当然この時間帯に母が出迎えする筈もない。

二人は小声で、

「ただいま」

「お邪魔します」

と言うと、足音無く階段を昇って行った。

「また明日」

「うん、また明日」

雄雅は部屋の扉を閉め、タンスの中にある布団を引っ張りだす。
そして、布団に潜り込む。

いつもなら2、3分で寝れる筈が、今日は10分経っても寝れずにいた。

仕方なく、雄雅は部屋の窓を開ける。冷たい夜風が部屋に入ってく

る。

ねえ、聞こえる？ いきなり帝の声無き声が聞こえた。どうかしたのかい？ 雄雅は驚きを抑え、少し間を置いて答えた。

眠れないの、そっちに行つて良い？ 帝も少し間を置いて答える。良いよ、俺も眠れないんだ、今度は即答で。

5秒ほどして帝が雄雅の部屋に入つて来た。服は着替えてすらいなかった。

「ちよつと星を見ようと思つてさ」

雄雅も服は着替えてはいない、自然な光景のように思えた。

雄雅は窓に手をかけ、屋根へと降り立つ。

「さ、こつちへ」

雄雅に促され、帝も屋根へと降り立つ。

二人は座り星を眺める。

ふと帝が、

「私の話の続き、聞いてくれる？」

「うん、良いけど」

帝は構わず続ける。

「私ね、前から雄雅の事が好きだったの」

「えっ」

あまりの衝撃的な言葉に、雄雅は頭の中が真っ白になった。変わらず帝は続ける。

「だから昨日話しかけられたのは本当に嬉しかったの」
未だに動揺していて雄雅は言葉が出ない。

「ごめんね、いきなりこんな事言つて」

ようやく、言葉が漏れる。

「いや、俺も嬉しいよ」

小さく、ぼやいた。

雄雅の言葉に帝はホツとした様子だった。

「俺も帝が好きだ」

拍子抜けした帝の表情が一拍置いて赤くなる。

そして帝が一言、

「雄雅って本当何考えてるのか分かんない」

そう言って笑った。

「そうかな」

雄雅も笑い返す。

「雄雅、今までありがとう」

「どうした？」

雄雅は一瞬躊躇った。

「私ね、一年前に死んでるの」

意味が、分らない。

「だから、一度でも良いから雄雅と話したいと思って来たんだ」

「死んで…いたのか」

思考に言葉が追いつかない。

無言のまま、帝は立ち上がる。

数秒の時を経て、

「ごめんね、嘘ついちゃって」

一言言って、雄雅の方を向く。

「嘘付く気はなかったんだけどね…」

帝は苦笑を浮かべ、無限に広がる星空へと視線を向ける。

傍らにある雄雅は、

「俺と、話したかったんだな」

ひとつ前の言葉に応え、立ち上がり、帝と同じように星空を見やる。

星空は明るく、満月の光にも負けず照り輝く星たち。

不意に、

「あ」

雄雅が帝を、優しく抱きしめた。

帝の温もりが、暖かさが、雄雅には寂しく思えた。

「帝」

小さくポツリと色々な感情の混ざった言葉を漏らす。

「ありがとう」

「……うん」

帝もまた、雄雅の温もりを感じ、しかし寂しいとは思わない。ポツリと帝の目から滴が落ちる。

そして一言、声なき声で帝が言葉を紡ぐ。

大好きだよ、雄雅

時刻は午前6時8分。

窓からの涼しい風に気づき、雄雅は目を覚ました。

「まだ早いな」

そう言つて窓を閉めようとして、

「……これは」

窓際に小さな手紙とお守りが置いてある事に気づく。

お守りを手に取り数秒眺める。手作りであるように見えた。そして手紙の内容をみた。

短く、簡潔に、

「私のお守りだよ」
とあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3301d/>

星の空へ

2011年1月16日06時53分発行